

タイトル	地域で育てる子どもたち(「住みやすい地域って、どんなことが条件!?!」)(<特集>特集・平成15年度開発特別講座・栗山町)
著者	松田, 光一
引用	開発論集, 73: 41-53
発行日	2004-03-31

地域で育てる子どもたち

松田 光 一*

1. はじめに

ただ今ご紹介いただきました松田です。栗山町からは、当初、「子ども会」について話せる人はいないかということで開発研究所が相談を受けたそうですが、本学には子ども会を研究している人はいないので、私がここに来るはめになりました(笑)。全国的には東京一極化、道内でも札幌への一極化が進む中、地域格差は益々顕著になり地方が活力を失っている現状があります。しかし、こうした中でも元気に健闘している地域が全国そして道内でも少なからず存在します。そのような地域に共通するのは、地域を引っ張っていく「人材」がそこにいるということです。地域問題を考える一つの視点は、そのような人材をどうやって地域で育てるか、地域づくりの運動をどのような方向でつくっていくかということだと思います。

以前に道内の公立高校の校長、教頭先生を対象に高校とその地元地域のつながりについて調査したことがあります。その結果をみると古い伝統を持つ進学校ほど地域のことはあまり考えていません。そういうところでは大学に生徒を進学させることに大きな関心があります。そのことは否定しませんが、将来的にそれぞれの地域を引っ張るリーダーとして戻ってきてくれるといいのですが、現状はそうではありません。地元で優秀な人材を送り出すことはとても重要だと思います。北海道では人口が札幌とその周辺に集中しております。江別、石狩そして北広島あたりは札幌の隣ということで人口は増えています。逆に遠隔になればなるほど、地域社会から若者が抜けていきます。いろいろ努力しても人が出て行き思うに任せない現実があります。若者を地元で惹きつけておくことは難しいのですが、地域づくりの一端に教育を加えることの必要性を考えてもいいなと思ってここに来たわけです。今日は「地域で育てる子どもたち」というテーマを設定しましたが、どうして「地域で育てる子ども」という視点が今必要になってきたのかというあたりから話を進めたいと思います。

現在、教育は様々な面で問題をかかえその解決を強く迫られております。戦後50年以上過ぎあらゆる意味で構造を変えていかななくてはならない状況に教育もなっているわけですが、抜本的な教育改革の話は出てきません。教育基本法を変えるという議論は出てきていますが、そのようなレベルの問題ではありません。明治以来、日本社会に形成されてきた教育観や学校観を変えるような新たな視点からの改革が求められていると私は思っています。

* (まつだ こういち) 開発研究所併任研究員、本学法学部教授

その意味ではレジメの1ページ「はじめに」のところに書いておきましたが、教育の原点としての家庭のあり方が重要だと思います。いろいろな学校の先生たちに聞きますと、教育問題のスタートは家庭教育という点では一致します。家庭の教育力がきわめて落ちているとか、地域社会の教育力が落ちているという形ではマスコミにもよく取り上げられているのでご存知かと思います。家庭や地域社会の教育力が低下した理由の第1は、当たり前のことが当たり前として通用しなくなってきたことがあげられます。つまり、従来は世の中で自明だったものが失われてきているということです。かつては親をはじめとする大人たちは「嘘については駄目だ」「人の物をとっちゃいけない」など口をすっぱくして子どもにいつて聞かせたものでした。そこには何故ということは何も問われませんでした。自分がされていやなことは他人にしては駄目だという理解がみんなにありました。けれども今はテレビでやってましたが、子どもが「どうして人を殺しちゃ駄目なのか」という時代になっている。昔は「駄目なものは駄目なんだ」と暗黙の共通理解がありました。しかし、今はそういうものを問いかけるような風潮があるんです。そして最近の報道ですが、裁判所で裁判官が暴走族に対し「おまえたちは産業廃棄物より価値がない」といったそうです。すると裁判官がそのような表現をしたことが問題であるかのような論調で報道がなされます。私は樺太から引き揚げ小学校は三笠市にある幌内小学校に入りました。炭鉱が戦後復興で活気があった時ですから全校生徒が2千名を超す大規模小学校でした。1クラスに60名を収容する「すし詰め」状態で、悪さをして説教されることも日常茶飯事でした。同じことで何回も叱らねばならない教師は、さっぱり学習しないわれわれ生徒に向かって「おまえたちは人糞製造機か。そうではないだろう」と論じていました。おそらく今、教師が同じことをいったら、その先生は表現の問題で社会から叩かれると思います。その頃のわれわれは、「先生のいう通りだ」と思っていましたし、親にいったら「それは先生が正しい」ということになったと思います。そこには何が最優先するかということが共通に認識されていたということです。子どもをしつけるということ1つをとっても社会全体が同じ考えで対応していたわけです。

それから2つめに地域社会の共同性が薄れてしまったことがあげられます。かつては地域がいろいろな形で協力、あるいは共同しながら何かを進めることがあったわけですが、今は連帯意識が全くといっていいほど希薄化しております。これが地域社会の教育力の低下につながっているのです。その一方で、学校教育がその補完をしているかといえば必ずしもそうはなっていない。たとえば高校を考えてみてください。みんな高校に行く時代に行かなかったら「なぜあなたは高校に行かないのか」と問われるからしかたなく行く、決して高校で勉強したいから行くのではない生徒もたくさんいるわけです。大学もしかりです。就職するための1つの通過点と考えてしまうんです。何かを心底知りたいからとか、何を目指すからという目的意識に裏づけられた向学心ではなく、社会に出たときに学校を出ていないとまずいということで進学しているケースがたくさんあります。成績の良い子どもだって勉強そのものよりもできるならブランド力の高い学校というように妙な方向へ話は行ってしまうのです。あるいは職業選択の幅

を広げたいからそれなりの評価の定まっている学校へ進学するということになります。勉強したいという意味で学校は必ずしも評価されていないわけです。このような中で学校が家庭や地域社会に替わって人間形成をしっかりやることができる体制には必ずしもなっていません。その意味で子どもの人間形成を促す環境は、昔と今では大きく変わってきたことが指摘できます。

2. 子ども世界の変容

子どもをとりまく世界が、過去から現在でどう変わってきたのか資料2枚目をご覧ください。われわれの生活している社会環境を考えますと、過去から現在までこの図のように変わってきております。これは教育社会学者の藤田英典氏が作成した図です。融接社会から分節型社会を経てクロスオーバー型社会に至る関係を表したものであります。かつて存在していた家庭、地域、労働の場が混在した仕切りのない社会を藤田氏は「融接型社会」と呼んでいます。江戸時代の農漁村を考えていただければ一番わかりやすいのですが、遊びも学習も労働も余暇もすべて一つの空間で展開されていました。近代化される以前の社会はこのような状態にありました。家族はまさに生産の単位であり娯楽や教育の単位でもありました。親の労働の手伝いをしながら子どもたちは生産技術の方法を学習し技能を身につけていきました。遊びも家族みんなで行う。正月、お盆、お祭りという行事はふだんとは違うハレの日でその日はご馳走を食べたり、晴れ着を身につけるなど特別の日でした。冠婚葬祭に親族が集まってきた時、子どもたちは大人の間人関係や親族内の役割関係などを学習しました。親に替わって親族から注意を受けることだって決して珍しいことではなかったのです。どこからどこまでが学習、教育、労働、遊びという明らかな区別はないけれども、そこで多くの訓育機能や教育機能が展開され、社会で通用する人間教育もされていたわけです。そのような一部は私たちの子どもの頃には未だ残っていたものです。

ところが社会の産業化が進むと状況は大きく変わってきます。新たな職業が次々に生まれ、そしてその仕事に就くための養成機関が学校という形で整備されると学校と職業の結びつきが強くなっていきました。家族や地域から職業の知識・技術を学ぶのではなく学校で学ぶようになりました。その結果、資料の3番目に書いてある「学校化社会」という言葉が出てきたのです。それは日本を近代化させるための効率よいやりかたであったわけです。そして社会は融接型社会から分節型社会へと変わっていきました。

家庭と地域という空間、学校という空間、それから工場に代表される労働空間ができ、この3つの空間の間には仕切りとしての壁ができました。以前、兵庫県のある高校で8時半に女子生徒が校門に挟まれ死亡するという事件がありました。8時半という時刻で一般の社会空間と学校空間をきちっと分け、午後3時なり4時になったらそこから一般社会空間へ戻すという厳然とした壁が存在しているわけです。それから工場・オフィスと、学校や家庭・地域社会にも壁がありますから、今、多くの子どもたちにとって親がどういうところで働いているのかがな

かなか見えてきません。たとえば、お父さんがJRに勤めているといってもJRにはものすごい職種がありますから、子どもにはわかりにくいはずです。列車を動かすという目に見えるところと、陰で旅行関係を専門の仕事にしている職員もいますし、法律問題を専門に扱っている職員もいるわけです。苗穂に行けば製造業と同じ機械工場があります。JRの中でもそれぞれのやっている仕事の内容はまったく違うわけで、子どもたちにはお父さんの働いている職場がなかなか見えてこないわけです。

札幌で調査した時、建設会社の人に聞いた話ですが、工業高校の土木科を出た人を採用したが半年も経たないうちにやめたそうです。自分の考えていたような仕事ではなかったというのがその理由でした。工業高校で学び建設会社に入ったらそこにどういう仕事があってその内容がどのようなものかくらいの情報は予めもっていると思うのですが、というのがその人の意見でした。そういう点では子どもたちが労働世界をどう考えているのか思わず考えさせられる部分があるわけです。これなどは学校と企業との間の壁がそうさせたともいえます。

ただ、最近になってその壁はかなり崩れてきています。それを「クロスオーバー型社会」といいまして、家庭地域と学校の間が、生涯学習という形で、かなり往来が自由になってきています。本学でも定年退職した人、家庭の主婦、職業をもつ社会人などたくさんの方が学んでいます。これは若い学生にも刺激になっています。いろいろな経験を持っておられる方たちが、今、自由に学校で学べる仕組みに変わってきています。工場・オフィスと学校との間が「リカレント」教育で壁という仕切りはかなり低くなってきています。

それから、家庭と工場・オフィスの世界はサービス化ということで変わってきております。そういう変化の中で、子どもたちはどうなっていったのかということです。

融接社会からクロスオーバー型社会へ変化してきている中で子どもたちの世界をみるとまず子どもの遊び場がなくなった。テレビで「ドラえもん」をやっていますが、藤子不二雄さんという方はどんなマンガを描いても常に子どもたちの中心に「広場」という遊ぶ空間を描いています。そこに土管も描かれています。あれは一般的には公共事業だったんですが、その土管も重要な遊び道具になっていました。現在は危険ということで、そうした場所は塀で囲まれ、子どもが入れないようになっていっていますので、子どもたちの遊び場にはなりません。そして今は子どもたちの生活そのものが分節化されています。その象徴が時計です。子どもたちはみんな「時計」を持っています。われわれの時代ですと中学生の時もっていませんでした。高校に入ったら安い時計を買ってもらって、大学に入ったらもうちょっとましな時計を買ってもらいました。でも大学入ったらすぐ質草になりまして、ほとんど持ってない(笑)。時計がなくてもそんなに困らなかったわけです。でも今の子どもたちは、時計、あるいは携帯電話をもたないと困るという環境におかれているわけです。

STVで「ズームイン朝」という番組をやっていますが、何年か前に富山県と東京で、家に帰った後の様子を子どもたちに絵を描いてもらったところ、まったく絵の内容が違ふんです。富山の子どもたちは外で子どもたちが遊んでいる絵を描く。東京の子どもたちは家の中、そこに出

てくる人数もすごく少ない。反対に富山の方ではたくさん人が出てくるんです。そこには子どもも大人も描かれています。これはまさに子どもたちが日常体験している世界がそのまま絵に現れているわけです。

岩手大学の研究者たちが岩手県の子どもたちの調査をしてこういうことをいっていました。盛岡市内の子どもたちに「油」というと調理の天ぷら油を連想したのに対して農漁村地域の子どもは重油、軽油など耕耘機、発動機をまわす動力源としての油というイメージを強く持っているということでした。それは常日頃、親たちがやっていること、やっていることを見ているから、同じ言葉のイメージする内容もかなり違って来るわけです。

子どもにとって「遊び」は重要といわれながら今、子どもの遊びすら手段化されているのではないのでしょうか。誰だって一般論としては「遊びは大切」といいますが、現実には「遊びはほどほどにして勉強しなさい」という話になります。「徹底的に遊びなさい」とはまずいわないはずです。ここが問題なんです。子どもにとって、遊びは生活そのものであり、本質的なことなんです。そういう認識をわれわれはしていない。

遊びの問題については古典として評価されているカイヨワの『遊びと人間』という本があります。そこでは遊びのファクターとして競争、偶然、模擬、めまい・スリルの4つをあげています。スポーツにしてもみんな「競争」です。時間を争うか得点を争うとか。「偶然」は、宝くじやすごろくなどのゲーム。「模擬」はごっこ遊びを始めとして、演劇、映画を観るのもここに入ってきます。「めまい」は、めまいを起こすようなスリルです。子どもの世界でも遊びには大なり小なりこのような要素が入っております。しかし、危険だから、教育的でないという観点から子どもが遊ぶときには、親や教員など大人がついて遊ぶとか、夏休みにボランティアがついて安全な中で遊ぶという話になります。これでは子どもは遊んだ気にはならないと思います。昔ながらに自由奔放に遊ぶという世界はなくなっています。私は川に突き落とされて泳ぎを覚えしました。昔はむちゃくちゃでした。

高校1年から3年までバタフライの選手として北海道代表で国体に出場した同級生がいますが、学校には水泳部はありませんでした。南空知大会で夕張に行った時、ある高校の先生から「君はどこで練習しているんですか」と聞かれたので、「沼です」と答えてびっくりされたという話を今でも懐かしげにしております(笑)。炭鉱ではズリが出ますから、それを捨てる場所はズリ山になるわけで、ちょうど沢をふさぐ形ですり鉢状の深い沼ができ、それを炭山沼といていたんですが、それがいつのまにかターザン沼にいい換えられていました。夏には、放課後、帰宅した後で子どもたちはそこに遊びに行き泳いでいたわけです。彼もその中の一人でした。地域の大会に出たらいい成績をとった。でも、学校のクラブ活動でもなく顧問も監督もいないと公式の大会では出場できないので、急きょある先生に部長になってもらって、大会に出場したら優勝して国体に出場ということになったわけです。今の大人から見たらずいぶん危険な遊びをしていると思われるかもしれませんが、当時、子どもが危険な所で泳いでいるからやめさせろという話は聞いたことがありませんし、私の知る限りでは事故もありませんでした。遊び

ながら危険回避の能力も形成されていたと考えるべきです。

それから、年配の方はご存じと思いますが、昔はみんな「肥後の守」という小刀を持っていました。鉛筆を削ったり、学校の帰り道や帰宅後の遊びの中で重要な道具となっていました。刃物で人を刺したとかいう話はなかったわけです。今は「17歳と刃物」といったらすごい組み合わせになりますね。実際には17歳が多いわけではなく、40歳でも50歳でも年齢に関係なく事件を起こす人は起こしているわけです。しかし、なぜか若者の無軌道ぶりだけがクローズアップされる部分があると思います。そういう意味で、子どもたちから遊びを奪ったのは誰なのかという問題も考えなければならないわけです。

3. 学校化社会の出現

「学習」は個人の自発性に重きをおきます。江戸時代、親が跡継ぎにしたいと考えている息子が仮に学問好きで万葉集などをひたすら読んでいとなれば、とんでもない親不孝であり、勘当ものということにもなるわけです。本来、学習や勉強などというのは自分で好きなことをやる道楽のような部分があります。けれども明治になって分節型社会が急速に整備されるに従って、「これを勉強するためにはこの学校に行けばいい」という話になっていくわけです。逆にそこに行かなければ駄目ということになり、これがどんどんエスカレートした結果、学校で何を学んだかではなくて、通過点として「学校に行く」ことの意味が非常に大きくなっていきました。

自発性に基づく学習は、社会全体が伝統的に昔からやっている通りにやっていけば間違いのないという融接型社会の時代はそれでよかったのですが、明治以降いろいろな考え方や技術が外国から入ってくるとそれだけでは済まなくなります。

江戸時代までの庶民は、別に「日本国」という意識はほとんどなかったわけです。たとえば青森県は津軽か南部かで今もって八戸方面と弘前方面とは旧藩以来の言語・文化をはじめとする伝統が違うわけで、同じ県民でも地域的特性があるといわれております。長野県はもっと顕著で松本、上田、小諸などは一つの藩だったし、長野は善光寺の門前町でそれぞれが独自の文化をもっていました。長野県にはその他にも藩がまだたくさんありました。意見が分かれ険悪な雰囲気になると長野県の人たちはもめている途中で「信濃の国」という歌を歌うそうです。今喧嘩していた人もとりあえずは一緒に歌うことでその場を和ますと聞いたことがあります（笑）。

あそこには国立の信州大学があります。ふつうは県の名前をつけるんですが、なぜ「長野大学」にならなかったかということもともと長野市に師範学校があり、上田市に工業専門学校があり、伊那市には農業の専門学校、松本市には旧制松本高校があった。こういうものがありましたから、「長野大学」では長野市の大学というイメージが強く他の地域からクレームがつき、考えた末に「信州大学」になったそうです。

そういう意味では、かつてはみんな自分の住んでいる狭い範囲が生活のすべてだったわけで

す。明治政府はそれらを「日本」という物差しでまとめる必要があったのです。社会的、文化的価値基準がばらばらでは困るし、学習環境もばらばらでは困る。また、自発性にまかせていたら国家が求める知識や技術を学ばない人も出てきてそれは困るわけです。そこで、学校をつくって国家主導で上から強制的に義務教育を始めることにしたのです。そして明治5年に学制を發布して公教育制度をスタートさせました。

日本国民として全員を教育するわけですから、国語、算数、歴史というように科目をきちんと決めて、北海道から沖縄まで同じ内容を一定の期間内で教えるための授業をおこないました。そういう教育が今もずっと続いているわけです。学校でいい成績をとり上級学校へ進学すれば高い社会的地位が獲得できるシステムをつくりあげ、国家に必要な人材を集めていきました。その結果、学校が重要だと認識されるようになったのですが、問題は制度としての知識が肥大化してしまったことと学校の選抜機能が強化されたことです。

教科書に出てくるものは試験にも出てくるので重要であるとか、価値があると考え、逆に学校の教科書に出てこないものは覚える必要がない価値のないものという認識をもたせたことです。社会的常識のようなものは教科書には出てきませんから、生活する上で必要な常識的な部分は大きく欠けることになります。生活の知恵や一般常識、そういうものは教科書ではあまり教えないわけです。

親たちには自分の子どもが落ちこぼれたらどうしようという不安をもちます。反対に小学校低学年くらいで算数の成績がちょっといいと「うちの子はできるぞ」となりますが、そのことが子どもの考える能力に直結しているわけではありません。むしろ大事なのは国語だと思いません。最近「大きい声で本を読みましょう」といわれていますが、昔はどこでもやっていたことです。古い映画を見ていると、子どもが大きな声で教科書を読んでいるような場面が出てきます。昔はどこに行っても学校でみんなで一斉に本を読んでいた。みんなで読めば、自分が漢字の読みを間違っても覚えていても、そこで修正されます。今は一人一人に読ませて漢字がわからなかったら一人に恥をかかせることになりかねません。だからみんなで読むことに意味があるのですが、単純な同じ作業をさせるようなことは子どもを隷属的に扱うというのでいつのまにか行われなくなってしまったようです。お母さんたちにすれば、自分の子どもが落ちこぼれたらどうしようかということで、子どもに檄を飛ばすわけです。でも当の本人たちはそれほど学校に行く意欲を持っているわけではなく、親のために仕方なく進学しているという部分があります。あまりにも制度としての知識が重要視され、それに学校が組み込まれた結果といえます。

高校の場合でいえば学力による序列化が確実に進んでいます。どこの大学に何人入ったかどうかでその学校の評価が決まってくる。札幌の進学校あたりではかなりの数の生徒が予備校にも通っているわけです。ある意味では高校のおかげで大学に進学できたとはいえない状況があります。もともと能力があれば、どこにいたって入る人は入るんです。にもかかわらず予備校に行くというのは、まさに「落ちこぼれたらどうしよう」という強迫観念がそうさせている。

その基本に学校化社会という問題があり、肝心なことが学校では教えられていないという状況があります。

4. しつけの欠如

戦後の日本の家族の訓育機能は非常に低下しています。特に最近はそれが顕著になっているような気がします。戦後の特徴としては、価値基準の混迷と教え込みの不足をあげることができます。戦前と戦後では社会の価値基準が大きく変わりました。

昭和30年代前半、私が中学校に入った時に社会の先生が、「民法が変わったんだから、長男であるおまへたちはもう親の面倒みなくていいんだ」という趣旨のことを授業でいいました。みんなでみるという話だったんですが、「親の面倒をみなくていい」というところだけが切り取られて子どもから親に伝えられることになりました。隣に住む同級生が家に帰って、「父さん、先生がそう言ってたよ」といったら、その親父さんが酒を飲んだ時に学校に怒鳴り込んで、「そういう教育があるのか！」と。先生は、「私はそんなことは言ってないよ」ということで近所の話題になりました。(笑)。

考えてみますと、「戦後民主主義」といいますが、何が民主主義か、男女同権とはどのようなことなのかよくわからないままに進んできたのだと思います。最近でも言葉こそ違え「ジェンダー」がしきりにいわれる状況を見ると、昭和20年代、30年代では民主主義も男女同権もさっぱりわかっていなかったのではないかと思わざるをえません。道徳といえば戦前の修身道徳と同じようなとらえ方をしてこれを否定する社会的雰囲気もあって道徳的な意味での教育は軽視される傾向にありました。そんな時代に自信を持って親が子どもにしつけをできたかといえばできないわけです。正確には記憶しておりませんが、マンガ「サザエさん」にこういうのがあったと思います。フネさんとサザエさんが台所で食後の茶碗洗いをしている。カツオ君が今日、学校でみそ汁とテン普拉をつくったといえます。するとお父さんとマスオさんは男がこせこせしては大成しないといえます。そうしたらカツオくんが、「古い思想の人はみんなそんなことをいうって学校の先生がいていたよ」と。それであわてて男性2人が食卓の後片づけをする場面があります。これはまさにそういう世相を表していたと思います。

このような時代に戦前のことをいうと古くさいと思われるのではないか、何が人権なのかわからない時代に、「それは人権無視だよ」といわれたら嫌なので何もいわなくなってしまう風潮があったように思います。ましてや隣近所の子どもに注意して「余計なおせっかいだ」とその親から反論されたらもういう気力は失せてしまいます。このような積み重ねが子どもたちをあまりしつけないまま今日に至っているのではないかと思います。

それがしつけの厳しさの欠如という形で現れてきております。これは日本だけではなくて、先進工業国でその傾向が強いのですが、「父親の物理的、心理的不在」、子どものことはすべて妻にまかせてしまうことです。ドイツのミッチャーリヒという人が『父親なき社会』という本

の中でそのことを述べていますが、子どものことを女性にまかせ、夫はいるけれども心理的にはいないのと同じ状態になっているということです。最近、幼児虐待の話をよく聞きますが、これもかなりの割合で子どもを育てるのは妻だけなので、子どもと母親は密室にいるわけです。それが虐待かどうかという意識を母親は持っていないわけです。言うことをきかないから叩く、それが過度になると虐待という話になるのです。逆にいえば、夫も家事・育児に協力しなさいということだと思います。それが最近の高等学校で行っている家庭科を男女ともに学びましょうという発想です。しつけの欠如は父親の責任放棄という部分がかかなりありますから父親を会社人間からもう一度家庭に戻そうということになるのです。妻の精神的負担を減らすためにもぜひ戻ってほしいところです。

最近、夫婦2人だけで子どもはいないという夫婦も増えています。昔から子はかすがいいわれていますが、子どものいない夫婦間では話をするチャンネルが1本しかありませんから、喧嘩をしたらぶつりとそこで切れます。でも子どもが1人いれば夫婦の会話が一時的に途切れても子どもとの会話はそれぞれ存在します。2人いれば会話のチャンネルが増えます。ですから昔は、夫婦喧嘩をしてもたくさんのコミュニケーションのネットワークがありました。また、兄弟がたくさんいれば、互いにチェック機能が働きますから1人の子どもの異変に誰かが気づき注意することもできました。でも今は、将来、「いとこ」という言葉がなくなるのではないかと思うくらい少子化が進んでいます。

家庭のしつけ機能がかなり低下してきている状況で「しつけを学校におまかせします」という親も珍しくはありません。家庭におけるしつけと学校集団内での人間形成とは必ずしも同じではありません。学校は人間形成と知識・文化を伝える場なのですが、しつけを含めてやってもらいたいと思う親も結構な数います。しかし、それに反対する親もいるわけです。親の考え方自体が多様化しています。ですから親たちの要求を全部引き受けると学校は大変なことになってしまいます。学校は何でもかんでも引き受けるべきではない、極端に言えば「学校は勉強するだけだ」と割り切ったらどうかなどという意見も出てくるわけです。ヨーロッパでは個人の生き方の問題は学校ではなく家庭の問題でした。

資料の襟裳の子どもが昆布干しを手伝う記事にあるように、学校の成績に関係なく、浜で親の手伝いを一生懸命やっている子どもが、そこである種の誇りを持てるという状況も大切なことだと思うんです。家の手伝いという労働を通じてかけがえのない人間形成がそこで行われているのです。

5. 地域で育てる子どもたち

三重県鳥羽市に答志島という漁業の島があります。ここには昔から寝屋子という制度があって中学校を出た男の子が両親の揃った家の一部屋を借りそこで寝泊まりさせてもらう制度です。日柄の良い日を選んで家具を運び、家族同様に寝泊まりします。寝泊まりする家の親を寝

屋親といい、寝屋子は自分の家で夕食をすませ寝屋親の家に行きます。朝夕きちんと挨拶を交わしいろいろな話をするわけです。お手元の資料はインターネットからとったものです。20年くらい前にNHKでも報道されたことがありました。実の親だけではなく他人の目を通して地域で子どもをしつけ・育てることの大切さをこの制度は教えてくれています。高校・大学へと進学するようになった今日でも続いているようですが、これはかなり重要な示唆を与えてくれます。最近、東京の荒川区で形は違いますが小学生が夏休みに公民館で4日くらいの宿泊合宿をしているそうです。4日でも学年を超えてそういうところで寝食を共に行動することは大きな意味があると思います。全国どこの学校でも1年に何回か1年生から6年生まででグループをつくって何らかの活動をやっているようですがもっと長期にわたって寝食を共にするような活動をすることで、達成感や連帯感をもたせることができると思います。

最近の少年非行を見ていると、まったくブレーキがかかりません。年長者がいたら、「そんな馬鹿なことやめろ」とブレーキがかかるはずなんですが、そのような環境は揃っていません。もっとも最近では年上も駄目です。数日前の新聞に山形の30歳くらいの無職の男性が、戎橋のビルからコショウをばらまいたそうです。阪神タイガースの応援団が下にぞろぞろいますから、みんなコショウを浴びてくしゃみをする、それを見て喜んだという記事でした。こんな30歳なら中学生の指導もできないだろうと思いますが、少なくともまともな年長者がいれば、年下に対する指導力を発揮できると思うんです。そういう部分をどうやってつくるかということですが、これなどは学校のソフト面に深く関わってくる問題だろうと考えます。そして学校の教育活動としてやるとなれば先生の負担は大きくなります。しかしそれをあえてやる場所に学校の特色が出せると考えるのですが、今の義務教育ではなかなか難しいものがあるようです。

どこの学校の建物も立派になっていますが、その活用の中身を考えることが今重要なのではないのでしょうか。よく「地域に開かれた学校」といういい方をしますが、「学校の体育館を貸します」「図書室も使用してください」だけでは駄目だと思います。学校の施設・設備を地域に開放すること自体はいいことですが、もっと先生、生徒を巻き込んだ人的交流が必要ではないかと思うからです。札幌市の教育長をなさった土橋さんは「オンリーワン教育」を提唱しました。札幌に200校余りの小学校と100を超す中学校がありますが、金太郎飴の義務教育ではなく1つ1つの学校が個性を発揮して教育をしたらどうかと提案したわけですが何故か途中で降りてしまいました。東京では今、盛んにいわれていますね。それぞれの地域で学校をどうするかということですが、地域に根ざした学校、地域とともに歩む学校ということで、地域社会と家庭とを結んでいく学校の役割は大きいと思います。その意味では荒川区の取り組みなどは注目される場所です。

全国的に「地域で育てる子ども」ということで、たとえばボランティア学習とか体験学習とかいろいろな形でやっていますが、一過性のものにするのではなく、総合的な時間ができたのですからそれぞれの地域で経験者や専門家を呼んでやってみることが大切だと思います。それを1回きりにしないでほしいんです。先生より知識、技術、技能をもった人がいればそれを活

用するシステムを大胆につくったらどうなのかと思います。教員免許状に関係なくそれらの人々を活用し、先生はむしろ全体をアレンジメントする役割として位置づけることであらゆる教科が活性化する思うのですが。免許状を持っていないから駄目ではなく、いろいろな工夫で人材を活用する方向を模索する努力が必要かと思っています。そのような教育現場を行政や地域がどうサポートできるか試されているような気がします。栗山町が単独で「うちの町ではこういうことをやっている」とぜひ示せるようなものと考えていただければと思います。今の国の方針は一生懸命やるところにはカネを出すという方向に変わってきていますからそれなりの実績をつくっていくことが大切だと思います。

昭和41年に「期待される人間像」というのを中央教育審議会が答申しましたが、個人のことに国が関与するのはどうかということで評判は芳しいものではありませんでした。しかし、平成10年6月30日、中教審は「新しい時代を拓く心を育てるため」という答申を出しました。インターネットで取り出せますから見ていただきたいんですが、これは非常に細かいんです。「自分の子どもだけが良ければいいという考え方をやめましょう」「自分の行いには責任があるということを感じさせよう」「読書をする時にはこうしましょう」などと念入りに書いています。かつてこんなことをいったら、余計なお世話だとなったんでしょうが、今は誰も異議を唱えません。それくらい、社会全体が変わってきているわけであり、事態が深刻になってきているのです。

そういう中で、相変わらず子どもの教育というと「進学させればいい」と考えている人もいますが、大学に行ってもなかなか就職できない時代です。人間的にしっかりしたものをもたないと社会から受け入れてもらえないような状況があります。そう変わってきているにもかかわらず、相変わらず学歴偏重で、「進学さえできれば、多少常識がなくても人間性に問題があってもいい」とやっているのいろいろな事件が起こるんです。それをチェックする場所がない。かつて家族は一つ屋根に一緒に暮らし情愛によって支えられていました。このような家族を「コンテナ家族」というんですが、最近では変わって「ホテル家族」といわれています。各自がホテルの宿泊客のようにばらばらの状態です。これは中教審でもいっていることですが、もっと「ネットワーク型」の家族に変えなければ駄目なんです。家族の一人一人の人格を認め、家族の意識的なコミュニケーションのネットワークをつくっていく必要があるということです。もっといえば、家族だけではなくて地域社会をもっとネットワーク化して、お母さんたちが1人で子どもを育てることのないような社会をつくるべきだと思います。

先日、名古屋で4歳の子どもが高校生に蹴られて死んだ事件がありましたが、あれだって家族が多ければありえないでしょう。あの母親だけに責任を求めるのは簡単ですが、そういう子どもを地域で育てるシステムをつくっていかないともうまずいだろうと私は考えます。ただ、学校の先生がいうには、子どもの教育もさることながら、親の教育から本当は始めたいというのが本音のようです。どこかで変えていかないと変わらないんです。日本全体とか北海道全部などといっていたらいつまでも変わりません。だからやれるところから変えていこうというの

が私の主張なんです。

6. ま と め

まとめのところに書いておきましたが、「不確かな未来のために現在を犠牲にする教育の克服」を真剣に考えなければならない時代になったと思います。これはすでにルソーが『エミール』という本の中でいっていることです。右肩上がりの成長を信じ努力して今日の繁栄を達成して気づいたものを考えればおわかりかと思えます。それぞれ子どもが発達段階に応じて学習しなければならないことがあるはずで、子ども同士の喧嘩も当たり前です。子ども同士が遊びながら、あまり自己主張するとみんなから遊んでもらえないという体験を通じて協調的な心の大切さを学ぶわけですね。昔はみんなそうしていたと思います。経験を通じてさまざまなことを学習するはずなんです、そういう場を今の子どもたちは奪われているのです。そして奪ったのは大人たちです。

それからみんなが自分にバリアーをつくって、他人に干渉しない代わりに他人からも自分の生活に干渉させないという間違っただ個人主義が蔓延していることです。

人前でも平気で携帯電話で話をしてる人がいますが、まったくプライベートな世界を公の場にさらしても平気でいられるあの神経は理解できません。多分、他人が見えていないんじゃないかと思えます。そのような大人社会の現象が直接子どもの世界に反映しているといえます。こういう中では、子どもはまともに育っていかないのではないのでしょうか。

また子どもの人格を認めるということと厳しくしつけることは何ら矛盾するものではありません。今は人格を認めるということが甘やかしにつながっているように思えてなりません。最後になりますが人間評価の多元的尺度が重要だと思います。人間はそれぞれがなんらかの能力を持っていて、場と役割が与えられるとその能力を発揮するものです。その意味で人間を評価するシステムが学校の成績だけではあまりにも寂しい思いがします。

生涯学習の時代でどこからでも学習できる環境が整いつつあるわけですから目先の学力にとらわれない教育の模索も必要かと考えます。その意味で今まで通りの学校じゃなくてもっと学校は変わった形で地域と接点を持たなければならないということです。地域の子どもをつくり、育て、そして地域にどう還元するかを中心に考えるべきではないかと私は思っています。その点からもわれわれ大人が教育に対する見方を変えるところから始めなくては駄目だと思います。

戦後の経済発展が今日の繁栄を築き上げたが、右肩上がりの神話が崩壊した今日、経済の再生だけでは問題の解決にはならないのです。経済発展を支える人材を国を挙げて教育してきた結果がこのようになったわけですから教育も従来とは異なる視点から大きな変革を迫られて当然だと思います。

教育は重要といいながら経済に従属させる位置づけをしてきました。今の中国を見てくださ

い。20年、30年前の中国の街並みは日本に較べると近代化という点では遅れていましたが、今や、日本と変わらないですね。つまり、ビルを建てて新幹線を通すなどというのは一定の条件が満たされればすぐにできます。できないのは人を育てることです。国家100年の大計といいますが、国を発展させるかどうかの鍵は人づくりに勝るものはありません。

そういう意味で日本は、「次の世代を育てる子ども」という意識を持たないで、むしろ「マーケットの対象」として子どもを見てきたのではないのでしょうか。たとえば子どもたちが一斉に携帯電話を持ったらものすごい数になります。女子高生がみんな同じマフラーをしています、日本中で売ったらすごいカネになります。そういうビジネスの対象として子どもたちを見てきた。塾もそうです。本当に子どもたちを「育てる」というその意味での取り組みをわれわれは今まであまりしてこなかったのではないかと思うわけです。このあたりで大幅に方向転換する時期だと思っています。

近年、若者のフリーター化が社会問題になっていますが、「自分でとてもやりたい仕事があればやるけれども、そうでなければ無理に就職する必要はない」という考え方はかなり多い意見です。「昭和30年代、40年代というのは幸せだったんじゃないですか」と逆に学生たちに言われています。あの時代は将来に対する希望がもてましたが、今は展望を持ちにくい時代です。そのような社会をつくってしまったのも大人の責任ということになります。教育を通して若者が夢を持てる社会、地域がもっと元気になるような社会をつくるために何かをはじめなければならない時期に来ていると最近はつくづく感じています。

今年(平成15年)の7月、高知県の四万十川流域に十和村という村があるのですが、その役場の人たちと話す機会がありました。その人たちは次のようなことをいっていました。「最後の清流」といって今は観光客がたくさん来るようになったが、戦後は生活排水がそのまま流れ込む汚い川だったということです。沈下橋が有名ですが、増水した水が引いた後では農家で使っているビニールなどが橋に引っかかり、河原にはゴミが散乱する惨憺たる状態だったそうです。これでは駄目だからみんなで川をきれいにしようと一生懸命がんばった。その結果、清流が戻ったんですね。それを「最後の清流」としてNHKが全国に放送しました。最後の清流という言葉から受ける印象は、私の場合、そこにもともときれいな川が残っていたというイメージで受け止めていました。しかし、そうではなく一時は汚い川だったんです。それが流域住民たちの努力でこうなったんだということを誤解がないように伝えてほしいということでした。

この話からもおわかりいただけると思いますが、そこに住む人たちが何かに向かって行動を起こした結果、後でものすごいプラスになるという部分があることをぜひお考えいただきたいと思います。経済中心の考えではなくて、人を優先させるソフトの面で、まちづくり、地域づくりをすすめることがこれからの主流にならなければならないと思っています。そしてその中に子育て、教育といった部分を入れてゆくべきだと私は考えています。